



アイスランド語疑問文イントネーションの諸相

メタデータ	言語: jpn 出版者: 室蘭工業大学 公開日: 2018-03-23 キーワード (Ja): キーワード (En): Icelandic, interrogative intonation, falling tones, interrogative sentence structures 作成者: 三村, 竜之 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10258/00009604

アイスランド語疑問文イントネーションの諸相

三村 竜之*¹

Aspects of Interrogative Intonation in Icelandic

Tatsuyuki MIMURA

(原稿受付日 平成 29 年 7 月 3 日 論文受理日 平成 30 年 2 月 19 日)

Abstract

It has been claimed that a sentence final tone of an interrogative sentence in Icelandic is a (global) falling tone just the same as the one of an indicative sentence, whether interrogative pronouns are involved or not. However, almost all the previous studies on the Icelandic intonation have only dealt with the interrogative sentences with a complete sentence structure. Moreover, almost no previous studies paid any scientific attention to the differences between Icelandic indicative and interrogative sentences with respect to their sentence final tones.

Thus, the following two questions are still remained unsolved: i) what sort of a sentence final tone does an interrogative sentence with an incomplete sentence structure (e.g. *Eitthvað fleira?* ‘Anything else?’) have?; ii) are there any similarities and/or differences between indicative and interrogative sentences in terms of their sentence final tonal patterns?

This paper aims at inquiring into several unsolved aspects of the Icelandic interrogative intonation and solving those two questions based on the primary data elicited through the field research conducted by the author; the following conclusions are thereby drawn:

- a) all the interrogative sentences in Icelandic take a falling sentence final melody, regardless of their sentence structures and whether they involve interrogative pronouns/adverbs or not.
- b) any remarkable tonal traits specific to either of indicative and interrogative sentences are not found through experimental phonetic investigations.

Keywords: Icelandic, interrogative intonation, falling tones, interrogative sentence structures

1 序

1.1 本稿の目的と背景

アイスランド語のイントネーションに関する論及は、Bergsveinsson (1941)⁽¹⁾による記述研究を始めとして比較的豊富であるものの、近年は Dehé (2009)⁽²⁾に代表される特定の理論的枠組みに基づく分析が主流

*1 室蘭工業大学 ひと文化系領域

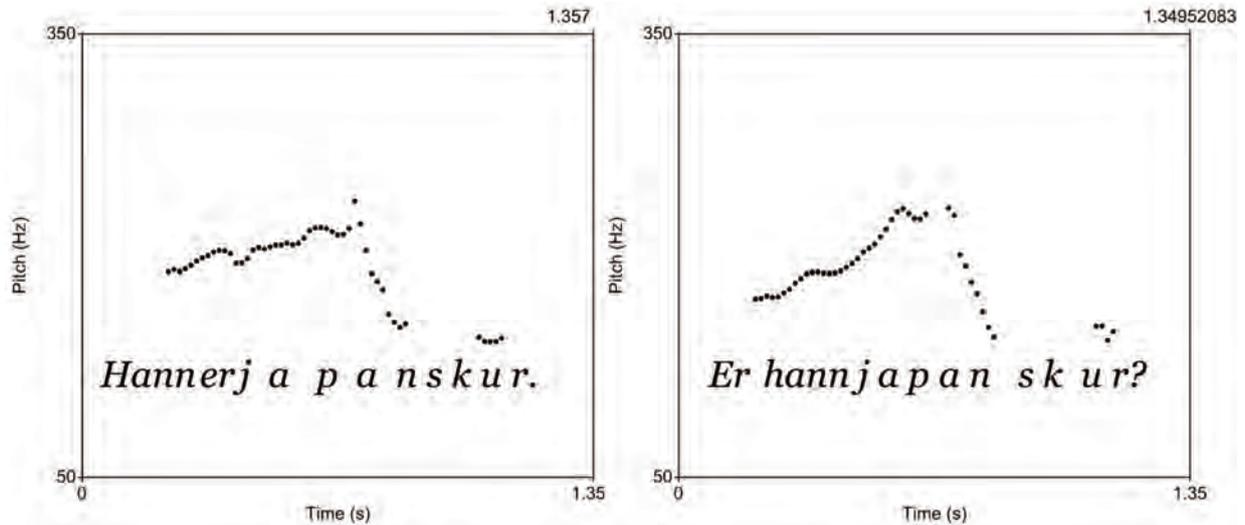


図 1: *Hann er japanskur.* と *Er hann japanskur?* のピッチ曲線

をなしており、その結果、疑問文や平叙文といった文の種類と個々の文に伴って現れる音調の種類との関係などごく基本的な事柄が未だ明らかとはなっていない。殊に疑問文に関しては、アイスランド語の初学者が拠り所とすべき知識や情報の蓄積は未だに十分であるとは言い難い。

例えば、アイスランド語の疑問文は、疑問詞の有無を問わず、平叙文と同様に下降調^{*2}が文末音調として現れることが既に指摘されている（例: Árnasson (1994-1995)⁽³⁾、三村(2016)⁽⁴⁾; 図 1 も参照のこと）:

- (1) a. *Hann er japanskur.* 「彼は日本人です。」
 he is Japanese
 b. *Er hann japanskur?* 「彼は日本人ですか？」
 is he Japanese

しかし、アイスランド語では *Hvað?*「何が/を？」や *Eitthvað fleira?*「他に何かいかがですか？ (Eng. *Anything more?*)」のような主語や述語動詞を欠く構造的に不完全な疑問文も実際に使用される。しかし、拙論を含めたアイスランド語のイントネーションに関するこれまでの論及では、完全な文構造の疑問文のみを考察の対象としており、文構造の不完全な疑問文の音調がいかなるものか明らかとはなっていない。また、同じく文末音調に下降調が現れる平叙文との比較・対照といった視点からの考察も先行研究には欠けている。その結果、アイスランド語の疑問文イントネーションに関して以下の二つの問題点が未解決のまま残されている:

- (2) a. 文として完全な構造を持たない疑問文の文末音調はいかなるものか。
 b. イントネーションの点で平叙文と疑問文の間に差異は存在するのか、存在するとすればいかなる差異が存在するのか。

本論考では、筆者が臨地調査を通じて採取した一次資料に基づき上記の問題点の解決を試み、アイスランド語における疑問文イントネーションの諸側面を明らかとする。

*2 一般に下降調という用語は、例えば声調言語 (tone languages) における一音節内部での音調の格好を想起させるが、本稿で用いる「下降調」という用語は、複数の音節に渡り発話末尾にかけて漸次的に下降する音調をも指す点に注意されたい。

1.2 アイスランド語概説

アイスランド語はアイスランド共和国（人口約 34 万人^{*3}；首都：レイキャヴィーク Reykjavík）の公用語である。印欧語族ゲルマン語派に属し、デンマーク語やノルウェー語などと共に北ゲルマン（ノルド）諸語を形成する。その他のノルド諸語に比して古語の姿を色濃く残しており、未だ形態論や統語論が複雑な点で特異である（疑問文の構造に関しては第 2.1 節を参照）。

音韻論的には、無論、英語やドイツ語などには立てられない音素が立てられうるものの、音素配列の傾向性や音節量の制約（例：軽音節は強勢を担い得ない）など、その他のゲルマン諸語に通ずる性格を有する。また、強勢を担う閉音節における母音量（母音の長短）と音節末子音の数の間に見られる相補的な関係や制約（例：VCC/VVC; VVCCは不可；なお、VVは長母音を示す）など、（デンマーク語を除く）ノルド諸語特有の特徴も保持している。なお、アイスランド語は他のゲルマン諸語と同様、いわゆるストレスアクセントの言語であり、原則的に語を構成する音節のいずれかに主強勢が置かれるが、多くの場合、左から数えて一つ目の音節に主強勢が置かれる。

一方、アイスランド語は、ゲルマン語ではごく一部の方言にのみ観察される「前気音 preaspiration」（上付きの[h]で表記）を有し、また無声の鳴音（voiceless sonorants）も多いためか、全体的に無声摩擦音が豊富であるかのような聴覚印象を与える。また、アイスランド語の閉鎖音は両唇音、歯茎音、軟口蓋音の三種類があり、それぞれ「声（voice）」の有無ではなく「気音（aspiration）」の有無で区別される点も特徴的である。

なお、ノルド語諸方言には、主強勢を担う音節の音調の「向き」（川上 1973: 45⁽⁶⁾；上野 1975: 49⁽⁷⁾）が音韻論的に指定されている（いわゆるピッチ/高さ/高低アクセントの）言語（方言）もあるが、アイスランド語には該当しない（三村 2016: 148⁽⁴⁾）。

1.3 調査・資料

本稿で引用する資料は、特別なことわりがない限り、全て筆者が臨地調査を通じて採取した一次資料である。既にイントネーションに関する予備的な調査を 2015 年 3 月と 9 月に実施し、今回、疑問文イントネーションの諸側面を明らかとすべく、2017 年 3 月に新たに疑問文並びに平叙文の読み上げ調査を行った。予備調査の概要に関しては拙論（三村 2016: 148⁽⁴⁾）を参照のこと。今回の読み上げ調査の概要は下記の通りである（調査項目の詳細に関しては第 3.1.1 節並びに第 3.2.1 節を参照のこと）：

(3) a. インフォーマントは 60 代の男女各一名：

i. Auður Guðmundsdóttir 氏^{*4}（女性・1955 年・Reykjavík の生まれ）

ii. Steinar Thorarensen 氏（男性・出生年未確認・Hella（Reykjavík から 90km ほどの距離）の生まれ）

b. プレゼンテーションソフトウェア（Apple 社 Keynote）を用いて調査項目である文を 2 秒^{*5}ごとにノートパソコンの画面上にランダムに提示し、一度ずつ読み上げてもらい（これを 1 セットとする）、合計で 3 セット実施した（各文、計 3 回の読み上げ）。

c. 読み上げられた文はデジタル媒体にて録音（Marantz 社 PMD661MKII；audio-technica 社 AT899；サンプリング周波数：96kHz）。併せて、調査ノートに文字資料としても記録。なお、調査項目だけでなく、調査の一部始終をインフォーマントの了承を得た上で録音した。

d. 読み上げに際しての発話意図の確認等に使用した媒介言語はデンマーク語。

*3 2017 年 5 月時点の数字（出典：Hagstofa Íslands⁽⁵⁾）。

*4 Guðmundsdóttir 氏は筆者のこれまでのアイスランド語に関する研究調査においてインフォーマントを務めてくださった方である。より詳しい情報は拙論（三村 2015）⁽⁸⁾を参照されたい。

*5 Guðmundsdóttir 氏は教師という職業柄故か、非常にゆったりとしたテンポで読み上げてくださることがこれまでの調査でも多かった。そこで今回の調査では、なるべく自然な発話に近いテンポで調査項目を読み上げてもらおうべく、2 秒という間隔で調査項目を提示することにした。

2 疑問文イントネーションの概要

2.1 アイスランド語の疑問文の構造

アイスランド語の平叙文の基本語順は「主語＋述語動詞」の順であり、この順序を入れ替えるいわゆる倒置により疑問文を作ることができる:

- (4) a. *Hann talar góða japönsku.* 「彼は上手に日本語を話します。」
 he SUBJ. speaks V. good Japanese
 b. *Talar hann góða japönsku?* 「彼は上手に日本語を話しますか？」
 speaks V. he SUBJ. good Japanese

但し、現実的には、(5)に示すような主語や述語を欠いた疑問文や、一語文など文構造が不完全な疑問文も珍しくはない:

- (5) a. *Má Ø bjóða þér eitthvað létt?* 「何か軽食をお持ちしましょうか？」
 may SUBJ. offer you something light
 b. *Eitthvð fleira?* 「他に何か？」
 something more

2.2 疑問文イントネーション

既に第 1.1 節にて触れたとおり、アイスランド語における疑問文は、疑問詞の有無に拘らず、文末音調には平叙文と同様に下降調が現れる(図 1 を参照)。拙論(三村 (2016: 155)⁽⁴⁾)より資料を追加する(表記を一部改変; L・M・H はそれぞれ「低」・「中」・「高」を示し、これらの記号の組み合わせで文全体の音調の概形を示す):

- (6) a. *Hvaða tungmál talarðu?* 「何語をあなたは話すのですか？」
 what language speak-you
 [M M H M M L L]
 b. *Er Einar kennari?* 「Einar は先生ですか？」
 is Einar teacher
 [M H H H M L]

なお、「A か B か」といった 2 項目間での選択を求めるいわゆる「選択疑問文」では、A に当たる語句の音調は下降調ではないものの、B に当たる語句(いわば選択疑問文の文末)には下降調が現れる(三村 (2016: 155)⁽⁴⁾):

- (7) *Talar hun dönsku eða sænsku?* 「彼女はデンマーク語を話すのですか、
 speak she Danish or Swedish それともスウェーデン語を話すのですか？」
 [HM M H H MM H L]

3 問題点の検証と考察

前節ではアイスランド語における疑問文のイントネーションを概観した。疑問詞の有無を問わず平叙文と同様に文末音調には下降調が現れるという点は明らかとなっているものの、第 1.1 節の(1)において

指摘した2つの問題点はいまだ残されている。本節ではこれらの問題点をそれぞれ詳しく検証並びに考察していくこととする。

3.1 第一の問題点: 不完全な文構造の疑問文

3.1.1 調査項目・資料

まず始めに、これまで先行研究が着目してこなかった一語からなる疑問文や、主語や述語動詞を欠く不完全な文構造の疑問文の文末音調について検証と考察を行う。これらの疑問文の文末音調を検証すべく筆者は、(8)に示す15種類の疑問文の読み上げ調査を行った:

(8) 不完全な文構造の疑問文

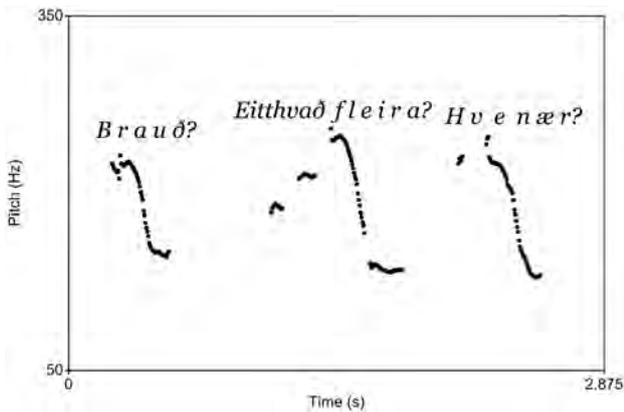
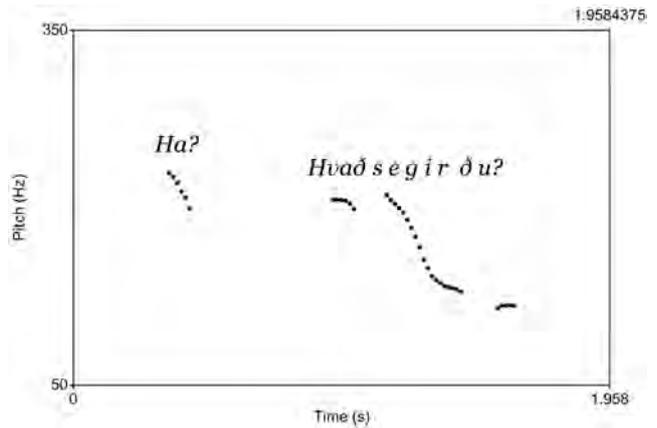
- | | | |
|-------------------------------|----------------------------------|---|
| 1. Klukkan hvað?
「何時ですか?」 | 2. Brauð?
「パンですか?」 | 3. Má bjóða þér eitthvað létt?
「軽食をお持ちしましょうか?」 |
| 4. En epli?
「では林檎は?」 | 5. Hvar?
「何処ですか?」 | 6. Eitthvað fleirira?
「何か他にいかがですか?」 |
| 7. Hvenær?
「いつですか?」 | 8. En þú?
「ではあなたは?」 | 9. Ha?
「何て言ったんですか?」 |
| 10. Hvað mörg?
「幾つですか?」 | 11. Hvað með það?
「それが何か?」 | 12. Hvaðan í Kanada?
「カナダの何処からですか?」 |
| 13. Hvaða mynd?
「どの写真ですか?」 | 14. Ekkert annað?
「他には無いですか?」 | 15. Þessi með gleraugun?
「眼鏡をかけた彼の事?」 |

15種類の疑問文は、全て筆者が作例したものであり、インフォーマントから文法的並びに意味的に適格であるとの判定を受けたものである。既に1.3節において言及した通り、全ての文を2名のインフォーマントに3回ずつ読み上げてもらい、結果として延べ90例を採取した。

なお、読み上げてもらう文がなるべく意味的に中立的になるよう、事前に文の意味や発話意図に関してインフォーマントに確認した上で読み上げを実施した。また、調査項目は不完全な文構造故に、単独で提示した場合は不自然な発音になるきらいがあると考えられ、なるべく自然な読み上げとなるよう、全てダイアログの一部として提示した。以下に具体例を示す:

(9) ダイアログの例

- a. – *Kauptu mjólk og djús.* 「牛乳とジュースを買ってきて。」
buy-you milk and juice
– *Já, og kannski eitthvð að borða. Brauð?* 【cf. (8)-2.】
yes and perhaps something to eat bread
「いいよ、多分何か食べるものもね。パンはどう?」
- b. – *Ég ætla að fá eina appelsínu.* 「オレンジを一つください。」
I am going to get a orange
– *Eitthvað fleira?* 「他には何か?」 【cf. (8)-6.】
something more
- c. – *Nennirðu að koma með mér í bíó?* 「一緒に映画を見に行きませんか?」
want-you to come with me in cinema
– *Já, hvenær?* 「いいですよ、いつですか?」 【cf. (8)-7.】
yes when

図 2: *Brauð? Eitthvað fleira? Hvenær?* のピッチ曲線図 3: *Hvað segirðu?* のピッチ曲線

3.1.2 検証と考察

(8)に示した不完全な文構造の文末音調を精査した結果、採取された延べ 90 例全てにおいて下降調が現れていることが明らかとなった。参考までに図 2 に(9)の疑問文のピッチ曲線を示す。

既に第 2.2 節並びに拙論（三村 2016⁽⁴⁾）を含む先行研究において指摘されている通り、完全な文構造を有する疑問文の文末音調は下降調であり、この事実を踏まえると、アイスランド語の疑問文の文末音調に関して以下の結論を導くことができる：

- (10) アイスランド語において疑問文は、疑問詞疑問文であっても yes/no 疑問文であっても、また文として完全な構造を有するか否かを問わず、文末には一貫して下降調が現れる。

なお、英語では、発話者の発話内容が不明確な場合、確認のために疑問詞疑問文を上昇調で用いて問い直すことがあることはよく知られている（渡辺 (1980: 59)⁽⁹⁾）。アイスランド語におけるこの種の「繰り返し疑問文」の例は、現時点での筆者の資料では(10)に示す一例のみが確認されているに過ぎない。従って推察の域を脱しえないが、これまでの検証と考察の結果も踏まえると、おそらく「繰り返し疑問文」における文末音調もアイスランド語では下降調であることが予想される（図 3 も参照のこと）。

- (11) *Ha? Hvað segirðu?* 「えっ、何ですか？ なんとおっしゃったのですか？」
pardon what say-you

3.2 第二の問題点：平叙文との差異

これまでの他言語のイントネーション研究から次の二点が指摘されている：

- (12) a. 平叙文と疑問文で基本的に語順に差異の見られない言語（例：ロシア語）では核音調 (nuclear tone) の位置が異なる (Ladd (1996: 168-169)⁽¹⁰⁾)。
b. 平叙文と疑問文のイントネーションが類似する言語（例：フィンランド語）では疑問文の方が核音調の音域 (pitch range) が大きい (Iivonen (2005: 120)⁽¹¹⁾)。

他言語における上記の指摘を踏まえて、筆者は次の 2 点に関してアイスランド語の平叙文と疑問文の間に差異が確認されるか否か検証を行った：i) 核音調（下降調の開始）の位置；ii) 下降調の下げ幅。

3.2.1 調査項目・資料

上述の2点について検証すべく、筆者は平叙文と疑問文の読み上げ調査を行った。調査項目をダイアログの一部としてではなく文単独で提示した点を除いては、すべて5.1節にて検証した構造的に不完全な疑問文の場合と同様の手法で調査を実施した。なお、検証の便宜上、種々の要因が介入することを回避すべく、構造的に複雑な文は避けて、単文のみを資料として採取した。採取した資料は48例（平叙文28例、Yes/No-疑問文13例、疑問詞疑問文7例）。以下に具体例を数例示す：

(13) a. 平叙文

- (i) *Einar er íslendingur.* 「Einar はアイスランド人です。」
Einar is Icelander
- (ii) *Sigríður kemur bráðum.* 「Sigríður はすぐに来ます。」
Sigríður comes soon
- (iii) *Þarna er sonur Björns.* 「あそこにいるのは Björn の息子です。」
there is son Björn-GEN.

b. Yes/No-疑問文

- (i) *Er Einar íslendingur?* 「Einar はアイスランド人ですか？」
is Einar Icelander
- (ii) *Talar hún dönsku eða sænsku?* 「彼女はデンマーク語を話すのですか、
speaks she Danish or Swedish それもとスウェーデン語ですか？」
- (iii) *Er ekki til ostur?* 「チーズは無いのですか？」
is not ADV. cheese NOM.

c. 疑問詞疑問文

- (i) *Hvað heitir frænka þín?* 「あなたの叔母さんのお名前は？」
what is called aunt your
- (ii) *Hvaða tungumál talar hann?* 「彼は何語を話すのですか？」
which language speaks he
- (iii) *Hvaða dagur er í dag?* 「今日は何曜日ですか？」
which day is in day

上記の48例を2名のインフォーマントに3回ずつ読み上げてもらい、延べ288例を採取した。

3.2.2 検証・考察

第一に核音調である下降調の位置に関して検証する。英語では「内容語 *content words*」が文のリズムの拍（いわゆる文アクセント）を担いやすく、一方で「機能語 *function words*」は拍を担い難いことが指摘されている（例: Pike (1945: 118)⁽¹²⁾）。アイスランド語においても同様に、原則的にはリズムの拍は内容語（の主強勢を担う音節）が担う（三村 2016: 152⁽⁴⁾）。

アイスランド語の文は、長くなるにつれて小さなリズム上のまとまりに分かれる傾向があり、個々のリズム上のまとまりの末尾には漸次的な下降も含めた下降調が現れる。ここでは、採取された288例の主観音声学的観察（いわゆる聞き取り）とPraatを通じて得たピッチ曲線の観察に基づき、リズム上のまとまりに現れる下降調の内、最も顕著な音調の遷移の位置を精査した。その結果、核音調、換言すれば下降調ないし漸次的な音調の下降の開始位置は、平叙文と疑問文の別を問わず、また疑問詞の有無を問わず、全て文の最後の内容語（の主強勢を担う音節）であることが明らかとなった。次頁の図4に示し

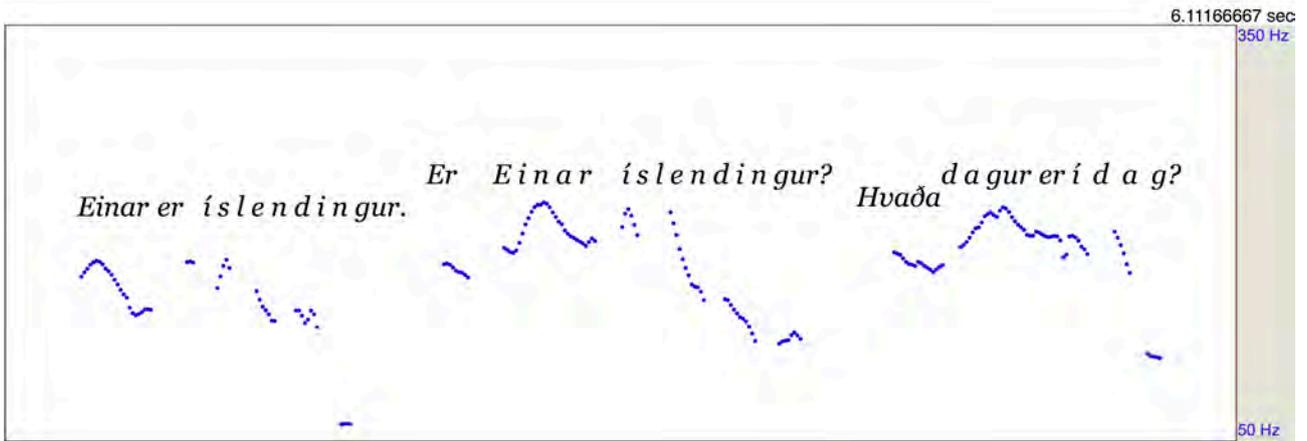


図 4: *Einar er íslendingur. Er Einar íslendingur? Hvaða dagur er í dag?* のピッチ曲線

たピッチ曲線も参照のこと。文末の内容語（平叙文と Yes/No-疑問文では *íslendingur*、疑問詞疑問文では *dag*）において下降調の開始が確認される点に注意されたい。

以上から以下に示す結論を導くことができる:

- (14) 平叙文と疑問文（疑問詞の有無は問わず）のいずれにおいても核音調である下降調ないし漸次的下降は文の最後の内容語に現れており、平叙文と疑問文の間に差異は確認されない。

なお、前後の文脈等の要因からある語（機能語の場合もあり）に焦点（フォーカス）が置かれる場合は、例外的にその語に核音調が現れうることを付記しておく（核音調の現れている語を太字で示す）:

- (15) *Hann talar **japönsku***. 「彼は日本語を話します。」（フォーカス無し）
 cf. *Hann talar japönsku*. 「彼が日本語を話します。」（フォーカス有り）
 【例えば *Hver talar japönsku?* 「誰が日本語を話すのですか？」の返答として】

続いて、二点目の問題点である下降調の下げ幅の検証に移る。採取された平叙文と疑問文 48 例（延べ 288 例）全てに関して、下降調が現れる文の最後の内容語の基本周波数の最高値と最低値、並びに両者の差を抽出し、それぞれの平均値を算出した。基本周波数の抽出には Praat (Boersma and Weenink 2017⁽¹³⁾) を使用した。基本周波数の抽出と最高値等の算出方法の概要を以下に示す:

- (16) a. 採取された 288 例全てを Praat で処理し、ピッチ曲線を表示させる。
 b. 各文の最後の内容語（のピッチ曲線）を Praat 上で選択し、その範囲内で基本周波数の最高値 (maximum pitch) と最低値 (minimum pitch) を自動的に抽出。
 c. 計算により、b. で得られた数値から平均値とその差を算出。

検証結果を次ページの(17)に示す:

(17)

	文の最後の内容語の基本周波数の平均値 (Hz)		
	最高値 (a)	最低値 (b)	差 (a-b)
平叙文	198.3726851	108.7482282	89.6244569
Yes/No-疑問文	213.2969581	130.3815142	82.9154439
疑問詞疑問文	200.0168451	125.5151966	74.5016485

上に示した表から、文の最後の内容語の基本周波数に関して、最高値、最低値、両者の差のいずれの点においても平叙文と疑問文の間に顕著な差異は確認されないと考えられる*6。ここから以下の結論を導くことができよう：

(18) 核音調である下降調の開始点や下げ幅に関して、平叙文と疑問文のそれぞれを特徴付ける固有の傾向性や顕著な差異は存在しない。

既に述べた通り、アイスランド語では平叙文と疑問文の差異は語順によって明示されるため、文末音調の点で両者の間に顕著な差異が存在しなくとも言語運用の面では支障をきたすことはないと考えられる。

なお、英語では、例えば *But you had seen man wife?* (渡辺 (1994: 147)⁽¹⁵⁾) のように、平叙文と同じ語順の疑問文も現実の自然な会話では使用されうる。同じくアイスランド語でも、おそらく平叙文と同様の語順で疑問文として使用可能な文はありうると考えられる。疑問文という文形式とイントネーションの型との関係を検証する上では極めて有力な資料になり得るものの、いかなる条件のもとで可能であるか現時点では不明である点に加え、インフォーマントからは不適切と判定されたため、本研究での調査項目からは除外した。

4 結語

4.1 まとめ

以上、先行研究がこれまで着目してこなかった疑問文イントネーションの諸側面を精査し、以下の結論を導いた：

- (19) a. アイスランド語において疑問文は、疑問詞疑問文であっても yes/no 疑問文であっても、また文として完全な構造を有するか否かを問わず、文末には一貫して下降調が現れる。【=(10)】
 b. 平叙文と疑問文（疑問詞の有無を問わず）のいずれにおいても核音調は文の最後の内容語に現れており、平叙文と疑問文の間に差異は確認されない。【=(14)】
 c. 核音調である下降調の開始点や下げ幅に関して平叙文と疑問文のそれぞれを特徴付ける固有の傾向性や顕著な差異は存在しない。【=(18)】

近年、イントネーションの理論的研究は目覚ましい発展を遂げているものの、その一方で、記述研究の進んだ一部の言語を除いてはイントネーションの実態が不明確な言語も少なく無い。この点で本研究の成果は、世界の諸言語のイントネーションの実態を明らかにする上で貴重な資料を提供するという意味で、極めて意義の大きいものと言えよう。

また、教育的な観点からも本研究の成果は重要である。参照文法も含めてアイスランド語の教科書は数あるものの、イントネーションについて紙数を割いたものは皆無に等しい。従って本研究の成果はアイスランド語の発音指導において大いに資するものであると言えよう。

*6 二名の覆面査読者の一名より数値データの検定に関して指摘をいただいた。詳細は第 4.2 節を参照されたい。

4.2 今後の課題

今後の課題としては次の4点が挙げられる。第一に調査方法の改善が挙げられる。川上 (2000: 34)⁽¹⁴⁾ は「【一方、】アクセントやイントネーションの研究の実験台にされた人が真に自然なイントネーションで発音することは【中略】まずまず有り得ないことである」と指摘している。確かに不自然な発音となることは不可避ではあるが、インフォーマントに可能な限り自然な読み上げを行ってもらうにはいかなる手法が最適であるか追求することは無駄ではあるまい。また、「繰り返し疑問文」のように読み上げ調査では採取の困難な文のイントネーションをどう採取するか、調査方法の改善が急務である。

一点目と関連するが、本研究における数値データの扱いも課題として残されている。脚注6にて既に触れたが、二名の覆面査読者の内の一名から統計学的な検定の必要性について指摘を頂いた。確かに本研究の数値データには統計学的な検定を行っていないが、それには単純かつ明快な理由がある。それは、現段階では筆者が持つ統計学の知識があまりに乏しく、そもそも検定が必要な数値データであるのか否か、また、もし必要であるならばいかなる検定が適しているのかといった判断ができなかったからである。査読者からのご指摘は至極正当であると筆者は理解しているが、一方で、数値データであれば猫も杓子も検定を行いその正当性を主張する昨今の研究の風潮に疑念を抱いているのも事実である。今後は統計学に関する知見を深め、本研究の数値データに対する検定の必要性の有無やその種類に関して検討し、本研究で導かれたデータと結論の数値的な裏付けを行いたい。

第三の課題として方言差が挙げられる。イントネーションの方言差については Árnason (2005: 479)⁽¹⁶⁾ にわずかに言及があるものの明らかとなっている点は極めて少なく、殊に疑問文に関してはほとんど明らかとなっていないに等しいのが実情である。ちなみに、アイスランド語には文を単独で読み上げた音声コーパスが存在し(篠田・古市 2012⁽¹⁷⁾)、本研究の基盤をなす口頭発表(三村 2017⁽¹⁸⁾)の採択後にこの音声コーパス入手並びに参照したところ(2017年4月29日参照)、話者20名(男性13名、女性7名)の内、疑問文の文末音調が上昇調となる話者が一名(男性)確認された。自然談話のコーパスではないため何らかの要因で不自然な発音になった可能性は否定できないが、その一方で、それぞれの話者の出生地に関する情報は明らかとなっておらず、従って、上昇調がこの話者の方言的な特徴であるという可能性も否定はできない。今後は様々な土地の出身者に協力を得て、疑問文イントネーションの調査を進める必要がある。

最後の課題として、平叙文と疑問文の文末音調を真に区別する音声特徴はあるか、あるとすれば何かという問題が未だに残されている。例えば *Brauð?* のように一語文の疑問文は語単独で発音した場合の *Brauð* といかにしてアイスランド語の母語話者は区別をしているのかという点に関しては未だ明らかとなっていない。今後は知覚実験等を進めて問題点の解決を進めていく必要がある。

謝辞

本稿は本文において言及した2名のインフォーマントの方々のご尽力なしには決して成し遂げられなかったものである。本研究のみならず、筆者のこれまでのアイスランド語に関する研究調査に貴重な時間を割くことを厭わず協力してくださった Auður Guðmundsdóttir 氏、並びに今回の臨地調査で尽力してくださった Steinar Thorarensen 氏にこの場をお借りして心より感謝申し上げます。

本稿は、日本言語学会第154回大会(2017年6月24日・首都大学東京八王子キャンパス)における筆者の口頭発表において頂戴したコメントを元に、大会予稿集原稿(三村 2017⁽¹⁸⁾)に加筆並びに修正を加えたものである。貴重なコメントを下さった聴衆諸氏、とりわけ次の方々(心よりお礼を申し上げます)：入江浩司先生(金沢大学教授)、上野善道先生(東京大学名誉教授)、窪菌晴夫先生(国立国語研究所教授)、西村康平先生(いわき明星大学准教授)、林範彦先生(神戸市外国語大学准教授)、松浦年男先生(北星学園大学准教授)。

なお、本論考の基盤をなす臨地調査は、日本学術振興会科学研究助成金による資金援助を受けて実施した(課題番号: 15K16729; 研究代表者: 三村竜之)。

文献

- (1) Bergsveinsson, Sveinn, *Grundfragen der Isländischen Satzphonetik*. Kopenhagen: Einar Munksgaard; Berlin: Metten, 1941.
- (2) Dehé, Nicole, “An intonational grammar for Icelandic,” *Nordic Journal of Linguistics* 32.1, 2009, p.3-34.
- (3) Árnason, Krisján, “Tilraum til greiningar á íslensku tónfalli,” *Íslenskt mál og almenn málfræði* 16-17, 1994-95, p.99-131.
- (4) 三村竜之, 「アイスランド語における文音調 (イントネーション) の記述に向けて」, 『北海道言語文化研究』, 14, 2016, p.147-158.
- (5) *Hagstofa Íslands*, <http://www.hagstofa.is/> (2017年5月13日参照) .
- (6) 川上葵, 『日本語アクセント法』, 東京: 学書房, 1973.
- (7) 上野善道, 「アクセント素の弁別的特徴」, 『言語の科学』, 6, 1975, p.23-84.
- (8) 三村竜之, 「アイスランド語における無声歯茎ふるえ音の解釈について」, 『日本言語学会第150回大会予稿集』, 2015, p.284-289.
- (9) 渡辺和幸, 『現代英語のイントネーション』, 東京: 研究社, 1980.
- (10) Ladd, D. Robert, *Intonational Phonology*, Cambridge: Cambridge University Press, 1996.
- (11) Iivonen, Antti, “Intonaation käsitteen täsmennystä,” A. Iivonen, ed., *Puheen salaisuudet. Fonetikan uusia suuntia*, Helsinki: Gaudeamus, 2005, p.93-128
- (12) Pike, Kenneth Lee, *The Intonation of American English*, Ann Arbor: University of Michigan Press, 1945.
- (13) Boersma, Paul and David Weenink, *Praat: doing phonetics by computer*. Version 6.0.27. www.praat.org, 2017.
- (14) 川上葵, 「服部氏のネの音調の説に同調」, 『国語学』, 第51巻3号, 2000, p.33-34.
- (15) 渡辺和幸, 『英語のリズム・イントネーションの指導』, 東京: 大修館書店, 1994.
- (16) Árnason, Krisján, *Handbók um hljóðfræði og hljóðkerfisfræði: Íslensk tunga I*, Reykjavík: Almenna bókafélagið, 2005.
- (17) 篠田浩一, 古市貞熙, 『東工大多言語音声コーパス アイスランド語 (TITML-ISL)』【CD-ROM】, 東京: 国立情報学研究所音声資源コンソーシアム, 2012.
- (18) 三村竜之, 「アイスランド語における疑問文のイントネーション」, 『日本言語学会第154回大会予稿集』, 2017, p.82-87.